都道府県別賞一等

# 未来を育てる、未来を守る

佐賀県　佐賀大学教育学部附属中学校　三学年

北村　優咲音

「思ったより、お金がかかるね……。」

病院から帰る車の中、母が小さくつぶやいた。その声は、車のエアコンに吸い込まれるように静かだった。

私は祖母のお見舞いに来ていた。骨折による入院だった。病室は冷たく静かで、消毒液のにおいが漂っていた。ベッドの上の祖母は「早く家に帰りたいわ。」と笑っていたが、母の表情はどこか曇っていた。

私はそのとき初めて、病気やケガは、体だけでなく、お金にも大きな負担をかけるのだと実感した。

入院には診察代や治療費だけでなく、食事代や日用品費など、さまざまな費用がかかる。祖母は年金が主な収入だったため、このままでは家計が赤字になってしまうかもしれない、と母は心配していた。

数日後、母は少し安心したような顔で言った。

「保険の給付金が出るから、なんとか大丈夫そう。」

その言葉とともに、母の表情がやわらいだことが印象に残った。

それまでの私は、「将来に備える」と聞けば、真っ先に投資を思い浮かべた。家では家族が株式投資をしており、学校でも資産形成について学んだ。お金は増やしてこそ意味がある。私はそう考えていた。

しかし、祖母の入院はその考えを変えた。投資は時間をかけて資産を育てるものだ。けれど、病気やケガはこちらの準備を待ってくれない。

『もし、祖母が保険に入っていなかったら。もし、同じことが私たち家族に起きたら。』そんな考えが、帰りの車で何度も頭をよぎった。

私は今まで、お金を〝増やす〟ことばかり考えていた。でも、本当に必要なのは、〝困ったときに困らないようにすること〟ではないのだろうか。そこで、私は生命保険について調べた。

生命保険は「もしも」に備え、多くの人がお金を出し合って支え合う仕組みだと知った。投資と生命保険は、どちらも将来のためのお金だが、役割は違う。

投資は未来を育てるもの。生命保険は、その未来を守るものなのだ。

祖母はその後退院した。しかし、以前から患っていた骨粗しょう症が悪化し、認知症も進んだため、今はグループホームで生活している。

あの日、車の中で母がつぶやいた「思ったより、お金がかかるね……。」と

いう言葉。あの一言の意味を、当時の私は十分に理解していなかった。

今なら分かる。母が心配していたのは、お金そのものではない。お金の心配で、祖母の回復だけを願えなくなることだったのだ。

生命保険は、お金を受け取る制度ではない。大切な人を、大切な人として見つめ続けられる時間を守る仕組みなのだと、私は祖母から教えてもらった。

将来、私は教育に関わる仕事に就きたい。そのときは、「お金を増やす方法」だけでなく、「人生を守る方法」も伝えられる大人になりたい。

祖母の入院を経験するまでは、「安心」は貯金や投資があれば手に入るものだと思っていた。しかし今は違う。人生には、努力だけでは避けられない出来事がある。だからこそ、人は支え合い、備える。

私は祖母の入院を通して、生命保険とは「大切な人を安心して支えるための仕組み」なのだと学んだ。この気付きは、これから私がお金や人生について考える上で、きっと財産になるだろう。